

## CONNECTEDkind の実践で大切にしたこと

目黒区立五本木小学校 図画工作専科  
鈴木陽子

私は図画工作の専科教師として都内の公立小学校に勤め、小学生1年～6年の子どもたちの造形活動に40年余りたずさわっています。

図工の時間、子どもたちは、さまざまなもの、こと、ひとなどとかかわり、そのよさや面白さ、美しさ、不思議さなどを感じ取ったり考えたりしています。

子どもが絵を描く、ものをつくりだす過程では、心とからだをいっぱいにつかって、いろいろなことをこころみ、時には佇み、いきつもどりつして自分の思いを実現させていこうとする姿があります。

数年前に CONNECTEDkind と出会いました。1枚の写真には自然物（光）とその影。ここから思い付いたことを、自由に描き加えていくというアクティビティです。私は、写真の向きを変えつつ、しばらくじっと見つめ続けていくと、「あっ！」と思い付いた瞬間の楽しさを実感しました。しかしもっと面白くしたい、もっと別の何かに出会えるはず、と何枚も同じ写真をコピーしては描き続けました

この CONNECTEDkind は子どもたちの楽しい学びになると思い、図工の授業で題材にして取り組みました。その実践のプロセスで大切にすることを紹介します。

### 手渡し、委ねる

最初に子どもたちを側に集め、息のかかる距離で CONNECTEDkind の魅力や可能性など活動の見通しがもてるように対話をしながら手渡し、委ねていきます。

「タンポポの綿毛と影」の写真をみんなで囲み、「何が見えるかな」「どんな感じがするだろう」「何か聴こえる」「どんな想像が広がるかな」などと問いかけます。子どもたちは「自然」「光と影」「枯れている」「生きている」「優しさと悲しさを感じる」「今にも飛びそう」「はかない感じ」「いのちをつなぐんだ」など、それぞれに思ったことを話してくれます。

子どもたちの前で実際に描画材を使い演示します。タンポポの綿毛と影を手がかりにして、形を見付けて見立てる、または自分が感じたことをもとに想像を広げるなど、自分の表し方を考えてかくことを提案しました。簡単に2枚ほど子どもの前でかいて見せます。見せるというより私の行為や動きに身を重ねてもらいます。

描画材の選択肢も伝えておきます。シンプルに鉛筆だけでもいいですが、水彩色鉛筆、カラーブラシマーカー、細い黒ペン、水性クレヨン、パステルなど色や絵肌の異なるものを自分で選ぶことも、子どものイメージの広がりにつながると考え準備しました。

### 子どもに身を重ねる

活動が始まると、長い時間、黙って写真を見つめ続ける子、とにかく手を動かし消したりかいたりを繰り返す子、「何かに見えてきた?」「何だろう」「逆さにしたら?」友だちとおしゃべりをしている子、そのうち図工室がしんと静かになっていきました。

手渡し、委ねた後は、子どもの邪魔をしないように、子どもの感じていること、考え

ていることに想像力を働かせて、共感的に見守り、寄り添うようにします。「何をしているのかな」、「どうしてその色を使うのだろう」、「何度も強調している形にどんな意味があるのだろう」、「影の形に注目している」、「困っている子はいないかな」、など子どもの行為やまなざしから見取っていきます。そして手がけるほどに生まれ、変化していく形や色、表しつつある作品から読み取ることを繰り返し、子どもに身を重ねるようにして、静かに教室を歩いて回ります。

時にはそっと「今どんな感じがしているの」と子どもに尋ねてみることもあります。私が見取れていなかった子どもの考えに触れると、嬉しくなります。

子どもたちは、ここにある自然物とその影を手がかりにして、見えないもの、聴こえないものに想像をたなびかせてかいていくと、思ってもみなかった自分の感覚と出会えたのでしょうか。ことを起こして跳躍できたかのように、ほっとした、誇らしげな表情で私に作品を見せにきてくれました。

### **みんなのよさを感じ取る**

完成した自分の作品にタイトルを付けます。言葉を添えることで、自分の考えを意味づけることにもつながります。

さらに友だちが表した作品にタイトルを付けて鑑賞する時間を設定しました。自分のタイトルは見えないようにしておき、友だちが考えたタイトルを裏に書いてもらいます。作品を見合うだけでなく、友だちの思いを想像してタイトルを付けることはとても能動的な鑑賞の活動となりました。友だちが付けてくれたタイトルに、「どうしてそう思ったの」「そんなふう感じてくれたんだ」、「そういう考え方もできるんだ」と気付かされ、とても嬉しそうな表情です。楽しく盛り上がり、自分とは違う感じ方考え方と出会ういい時間が流れました。

子どもたちが表したものは、形からの見立て遊び、自分の感じたこと、想像、おはなしやものがたり、影と実在するもの、光と影、対の考え、感情や心の在りよう、季節の変化、天候、時間のうつろい、社会や世界へのまなざしなど様々なテーマに渡りました。

子どもたちにとって影はネガティブなものというより、むしろつながり合って共に在るもの、バランスをとりながら循環しているという印象をもちました。これはCONNECTEDkindの深さ、豊かさ、広がりであると考えます。

### **「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」**

都内で自然に触れることの少ない子どもたちには、日常の図工の授業を通して、意図的に自然を感じる活動を重ねています。大地の土を集めて色を比べる、その土を絵の具にする、木々の梢の冬芽をかく、風や水を形にしてみる、雨の音を形にする、空をかく、森のものがたりを工作する、間伐材を再生する、木材のぬくもりや匂いを感じる、陶土で形づくって焼成するなど、子どもの原体験を積み重ねるようにしています。CONNECTEDkindはまさにその実践となりました。

レイチェル・カーソンは、生まれつきそなわっている子どもの「センス・オブ・ワンダー」をいつも新鮮にたもちつづけるためには、わたしたちが住んでいる世界のよろこび、感激、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、すくなくともひとり、そばにいる必要があると言っています。

私も子どもたちにとって、そんな「ひとり」でありたいと思っています。

<参考文献>

・レイチェル・カーソン (Rachel Carson) 『センス・オブ・ワンダー』上遠恵子訳、森本二太郎写真、新潮社、1996年



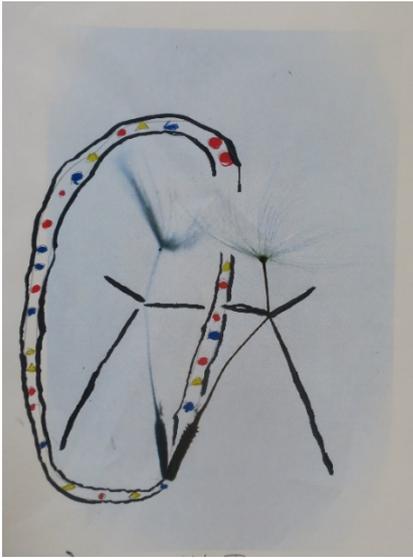
「寒くてもはばたく鳥」



「異次元への入口」



「光の花と影の花」



「鏡の中に入る人」



「たまる感情」